

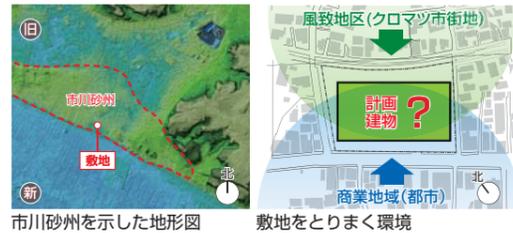
「歴史的なもの」と「新しいもの」2つの価値が共生する庁舎 → そこが、これからの市川をみんなで考える広場となる



設計における視点-1 新第1庁舎

「新と旧」2つの価値の共生をデザインする

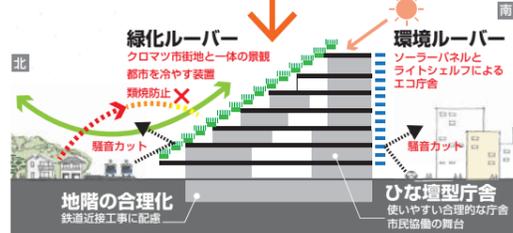
①市川市の都市構造は、歴史ある地域（北部）と、新しい地域（南部）によって構成されている。また、「歴史文化を守り育てること」と「新しい社会に対応するダイナミズム」がバランス良く調和している



市川砂州を示した地形図 敷地をとりまく環境

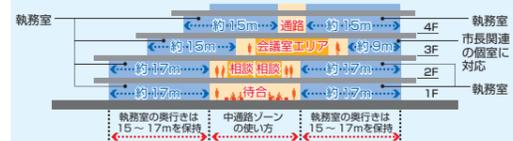
地下1階・地上7階建のひな壇型庁舎

①計画地は、厳しい日影規制、クロマツ市街地（風致地区）との景観調和・類焼防止、鉄道や国道からの騒音カット、鉄道近接工事への配慮など、様々な課題を克服する必要がある



- ②そのような敷地条件の中で、地上部に24,000㎡の面積を確保するためには、奥行き深い平面が上層に行くに従って後退する「ひな壇型」の庁舎となる
- ③その場合、庁舎中腹に当たる階の「奥行き設定」と「オフィスレイアウト」が重要となる

ひな壇型庁舎で、「全フロア適正オフィス奥行き」を保持するために、中通路ゾーンで奥行き調整ができる「中通路型プラン」を採用する



市民が使いやすく職員が働きやすい窓口計画

①窓口全体を見渡すことができる「中通路型プラン」に、目的の窓口へ誘導する「ユニバーサルサイン」を組み合わせることで、市民にとって使いやすい窓口とする

②迅速で的確な窓口業務とプライバシーに配慮した相談業務が行えるオフィスレイアウトや動線計画に配慮し、職員が働きやすい窓口とする



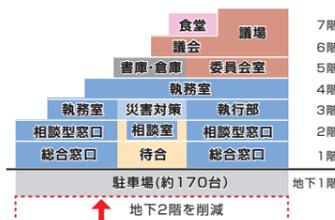
吹抜空間と市民活動スペースの考え方

①施設全体を視覚的・動線的につなぐ「吹抜」を限られた地上ボリュームの中で合理的に生み出す

②吹抜空間を市民活動の拠点となる「協働テラス」として計画し、市政参加の場を持つ庁舎をつくる



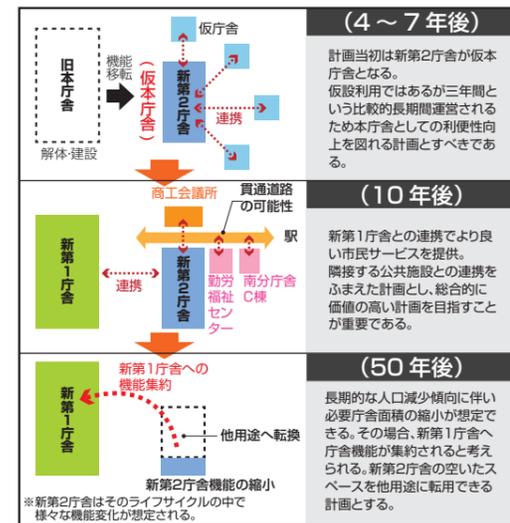
利便性・連携・独立性に配慮したフロア構成



設計における視点-2 新第2庁舎

様々なニーズに対応できる 新第2庁舎

①仮設本庁舎・新第2庁舎としての利用、将来的には庁舎規模の縮小に伴う用途転換まで対応できる可変性を持った施設づくりを行うことが重要である



地下なし・地上5階建の可変型庁舎

- ①1階柱頭免震+ピロティ駐車場の地下なし地上5階建
- ②約120台の駐車場を確保と、基準階平面の拡大で、窓口をワンフロアに集約（仮設本庁舎時）
- ③将来を見据え、福祉施設やコミュニティ施設への用途転換に対応できる構造・設備の総合システムを提案

	【基本構想案】	【今回提案】
平面イメージ	約1900㎡ 基準階平面	約2400㎡ 仮設庁舎時にワンフロアで総合窓口サービスが行える広さに拡大
面積		約125%拡大
断面イメージ	5F 4F 3F 2F 1F B1F 駐車場	5F 4F 3F 2F 1F ピロティ、駐車場 地下1階
駐車場	80台	+40台 約120台に拡大
基準階平面	1900㎡	×1.25倍 約2400㎡
窓口	1~2階	ワンフロアに集約 2階(エントランス階)
上階へのアクセス	階段+EV	エスカレーター設置で利便性向上 エスカレーター+階段+EV

設計における視点-3 2つの新庁舎の連携

周辺環境・交通状況の分析

①本計画では、新第1庁舎・第2庁舎とも本庁舎機能を有するため、互いの連携に配慮することが重要である

②2つの庁舎周辺の交通環境を分析し、その課題点の改善に寄与する動線計画を提案する



- ①新第1庁舎南側の国道14号は交通量が多く、新第1庁舎へ入る車が滞留すると、渋滞が生じてしまう
- ②新第2庁舎周辺は細い一方通行の路地が多いため、車両アプローチの検討は広域的視点が必要
- ③本八幡駅、新第1庁舎から新第2庁舎への最短ルートは敷地西側勤労福祉センター経由での西側アプローチ

設計における視点-4 環境配慮の視点を踏まえたランニングコスト削減

森の仕組みを取り入れた 森ECO庁舎

